



JPCOAR Newsletter CoCOAR

No. 14
February 2022

発行：オープンアクセスリポジトリ推進協会

jpcoar@nii.ac.jp

◀ IN THIS ISSUE ▶

- ・ イベントレポート：図書館総合展2021_ONLINE_plus
- ・ 特集：山地先生に訊く「リアルにつながる」国際連携のお話
- ・ JPCOARオープンアクセスリポジトリ戦略2019～2021年度の振り返り

ほか



イベントレポート

図書館総合展2021_ONLINE_plus

2021年11月19日、JPCOARは第23回図書館総合展2021_ONLINE_plusにて、フォーラム「JPCOAR2021：これからのオープンアクセスとJPCOARを考える」を開催しました。昨年に引き続き、オンラインでの開催となり、当日は176名の方にご参加いただきました。当日の資料や動画は、以下をご参照ください。

講演資料: <https://jpcoar.repo.nii.ac.jp/page/152>

講演動画: <https://youtube.com/playlist?list=PLZdRLSdt3sbg1FzPBe-JZ1JzuwUrDBG-M>

フォーラム中、多くの方に質問やコメントをいただきましたが、時間の都合上、当日はすべてのご意見をご紹介できませんでした。そこで今回のCoCOARでは、フォーラムに参加された方々へお声がけをして、意見交換の続きを行っていただきました！Google Jamboardというオンライン付箋のツールを使用して、コメントへのご意見をお寄せいただき、それを誌面上に再現しています。どうぞご覧ください。

テーマ 1

リポジトリ業務の担当になったばかりで、JPCOARのメーリングリストに投稿される内容や用語がよく理解できないという意見が寄せられました。

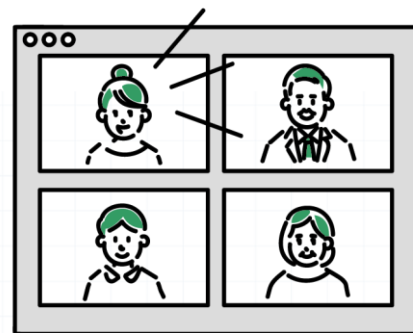
リポジトリについて知るためのおすすめ資料や、ご自身がされてきた学習方法などございましたらお聞かせください。

機関リポジトリ新任担当者研修の受講の他、過去のJAIR Cloudの掲示板や、JPCOAR NewsletterのCoCOAR、月刊DRFを読み込んで、色々と参考にさせていただきました。

JAIR Cloudコミュニティサイトの掲示板にも大変お世話になったので、今ならメーリングリストのアーカイブを検索したりするのも手かもしれません(見やすいとは言えませんが)。

NIIやJPCOARのフォーラム等には可能な限り参加するのが、近道のように思います。

私もリポジトリ関連のよく知らない内容や用語とくに遭遇することは多いです。やはり知識を得るにはNII、JPCOAR、各大学図書館協会、大学が主催するセミナーやワークショップに参加されるのが一番良いかと思います。最初は難しいと感じるかもしれませんが、参加し続けるとだんだんと理解できるようになってきます。



リポジトリの担当になったばかりの頃は、DRFの出しているドキュメント類が大変参考になりました。今ならJPCOARの研修資料アーカイブが参考になるかもしれません。

リポジトリ周辺の最新動向をつかむには、やはりNIIやJPCOAR主催の研修やフォーラムに参加するのがいいと思います。

テーマ 2

(JPCOARに限らず)作業部会に自分が参加したり、部下を参加させたりして、本人や組織としてメリットが得られたエピソードについて教えてください。

作業部会員を出していない機関の方は、どういう業務やメリットがあるなら参加してみたいと思いますか？

情報を入し、他の方の意見も聴いていく中で、自分で問題意識を持って考えることができるようになっていっていると感じます。

作業部会の活動をととして国やコンソーシアムが目指す方向性と自分の業務との関連性がなんとなくわかるとやる気にもつながります。

過去に作業部会に参加させていただきましたが、学術情報流通に関する知識を増やせ、いち早く国やコンソーシアム等の最新動向が把握できたり、他大学とのつながりがもてたのは大きかったです。貴重な経験ができる場なので、OSやEJに関心がある部下には参加を勧めるようにしています。

具体的に現在の仕事を行ううえで悩んでいることが、他大学の同じような業務を担当している方と共通していて、この悩みは独りだけのものではないんだ、と感じられることは意外と大きな救いになります。

たくさんの人と知り合うことができ、たとえ委員を離れたとしても大きな財産になっているはず。そのような経験は学内だけではなかなか得難いので、組織としても歓迎しますし、他の職員への刺激にもなります。

JUSTICEの作業部会に参加させていただいておりますが、やはり国公私立の設立形態の枠を超えて情報が共有でき、視野が広がることが大きいと思います。

本学では新図書館建設に向けて図書館が一丸となって検討を進めている段階ですので、現状のところ作業部会に参加する余裕がないのが正直なところ。申し上げにくいのですが、人員体制の問題から、作業部会に参加するのは難しいです。現在作業部会に参加して頑張っている皆様には感謝の気持ちでいっぱいです。

作業部会でしか出会えなかったであろう他のメンバーと組織を超えた大きな枠組みで一緒に課題をこなしていくこと(必死でついていっているだけですが)は、自分にとっての大変勉強になりますし、やる気にもつながります。

テーマ 3

JPCOARのメーリングリストについて、投稿のハードルが高いとの意見が寄せられています。投稿の敷居が高いと感じることはありますか？

また、どのようにしたらメーリングリストに投稿しやすくなると思いますか？

JPCOARに限らず、誰が登録されているのかわからないメーリングリストに実名で投稿するのは、勇気がいるだろうと推測します。

「こんな質問でもいいのかな…。」と悩むこともあり、匿名でも、些細な質問を投げかけたり、回答できたりするような仕組みだと、活性化されるように思いますが、いかがでしょうか。

掲示板からメーリングリストに変更になり、個人のメールアドレス等から投稿しなければなくなり、敷居が高くなったと感じています。

ちょっと分からないところがあるときに、いちいちメールを書くのは正直面倒だと感じてしまいます。メーリングリストに投稿する前に、自分で調べられるリファレンスツールがあるのが理想です。

ML投稿ルールが厳しいのもあるような気がします。

過去に複数から質問があった内容や「これさえ事前に確認しておけばどんな初心者向けに思える質問をしてもOK」のような縛め(?)があると、投稿のハードルが少しは下がるかもしれません。

JPCOAR次期JAIRO Cloud移行タスクフォース側は、担当者名の記載がないのに、投稿する大学側のみ個人名を名乗る必要があるのか不思議です。

初歩的な質問をメーリングリストにするのが気が引ける方がいらっしゃるかもしれませんが、最初から質問のレベルを選択できて内容のレベルを事前に予想できるようにしたら投稿しやすくなるでしょうか？例えば、「超初級」「初級」「普通」「中級以上」「全体」とか。



テーマ 4

教員から「有名なジャーナルへ投稿したほうが、知名度も上がるし、被引用数も増えやすいのに、なぜリポジトリ登録しないといけないのか」とご意見いただいたという事例が寄せられました。こうしたご意見が寄せられたことはありますか？

また、もしこうした意見が寄せられたらどう対応するといいいでしょうか？

研究者情報DBや機関リポジトリについては、各大学が基本的に備えるべき情報になりつつあり、そこに(著者版の)論文でも掲載した方が学術情報の発見可能性が高まりますので、論文を掲載希望誌に投稿されるとともに、頭の片隅に機関リポジトリをセットで考えていただくと有難いです。

教員から担当者へ「Gold OAになっている論文を、なぜ手間をかけて機関リポジトリに登録しなければならないのか？」と質問がきたと聞いています。機関としての発信力やアーカイブとしての機能は全く期待されていないということかと思います。また、登録手続きの煩雑さも課題です。

医学系論文で著者最終版のような不完全なものは寧ろ出たくないと言われて返答に窮したことがあります。雑誌購読していない・できない人達にも広く読んでもらえ、結果的に被引用率がアップした事例や、認知度のアップ・社会貢献の側面を強く打ち出して説得しましたが、正直同意する気持ちも大きく今でもモヤモヤしています。

「他のサイトですでに公開されているんだからリポジトリに登録する必要があるのか」というメールを頂いた時に「先生のユニットの成果物がリポジトリに1箇所集まっているのは便利ですよ」とコメントして協力頂いたことがあります。

リポジトリ登録のメリットの一つとして、リポジトリに登録することで、先生方の成果物が全世界に無料で公開されてvisibilityが上がり、さらなる被引用数upにつながりますよ、とお伝えすると、快くご協力いただけたことがあります。



テーマ 5

JPCOARのイベントのオンライン開催について、メリット・デメリット、改善点など、お聞かせください。

また、こういうイベントがあったらいいなどのアイディアがありましたらぜひお聞かせください。

オンライン開催は、遠方でも、業務の主担当でなくても、仕事の合間に興味があるイベントに気軽に参加できるため、私自身大変助かっています。ただ、オンライン開催とリアル開催では、コミュニケーションのしやすさに差異があるので、さらなる工夫が必要かもしれません。

利用者対応などで視聴の中断も多くなるのと、たまにネットワークの不調が途切れたり、話者の切替がスムーズにいかないことがある等がデメリットですかね。

研修参加は時間的・人数的制約があり、オンラインの方が参加しやすいというメリットがあります。一方で、イベントに集中して参加しにくいというデメリットもあると考えますので、併用開催だと嬉しいです。

オンライン形式は一時停止や何度でも見返しできるのでとても良いです。特に、図書館総合展はフォーラムが幾つも重なるので気になっても諦めることが多いですが、今回のようにリアルタイムだけではなく後から見られると、とても助かります！

地方の大学としては、オンライン開催は非常にありがたいです。気軽に参加でき、場合によってはアーカイブで復習できるのがメリットだと思います。デメリットはやはり他館の方との交流のしにくさでしょうか。コロナが収まってリアル開催が可能になれば、ぜひハイブリッドで開催していただきたいなと思います。

リアル開催では、旅費や業務体制の都合上、出席者を1人に限定したり譲り合ったりせざるを得なかったと言う状況もありました。また、職位に限らず(管理職から非常勤職員まで)、場合によっては複数人数で意見・感想を言い合いながら参加できるというのも、オンラインのメリットだと思います。もちろん、直接会うことのメリットを何十年も享受してきたので、今後もケース・バイ・ケースで、とも思います。

オンライン開催では、録画した動画や当日使用した資料が後日公開されることが多く、一度で理解できなかった内容の聴き直しやメモを取り切れなかった資料の内容について、再度確認できる点がメリットとして挙げられると思います。略語や専門用語が多く、基本的な概念は当然知っているかの前提で話が進むので、直接の担当者でない者や担当になっただけの初心者には助かるのではないのでしょうか。

意見交換へご協力いただいた方々

旭川医科大学I様 / 沖縄科学技術大学院大学U様 / 中央大学S様 / 同志社大学K様 / 東北大学K様 / 名古屋大学N様 / 藤田医科大学O様

山地先生に訊く「リアルにつながる」国際連携のお話

オープンサイエンスの文脈に限ったことではありませんが、「国際連携」ということばで海外組織との協力・協調が重要視されることがしばしばあります。しかし、そのことばは多くのひとにとって縁遠く抽象的なもので、“リアル”な響きを伴っていないのではないのでしょうか。そんな国際連携の実態についてもっとよく知りたいという思いから、“kazu”として長年その最前線で活躍されている、そして2018年からCOAR（オープンアクセスリポジトリ連合）のVice-Chairpersonの重責も担っておられる山地一禎教授（国立情報学研究所（NII）オープンサイエンス基盤研究センター長）にお話を伺いました（インタビューは2022年1月上旬にオンラインで実施）。

Q 山地先生が国際連携に関わりはじめたきっかけは？

理化学研究所でXooNIPS（リポジトリシステム）の構築をしていたころ、図書館コミュニティと関わる必要性を感じ、NIIに移りました。三十代半ばだった2008年に、DRF（デジタルリポジトリ連合）の関係者と初めて国際会議Open Repositoriesに参加して、ちょんまげをした日本人くらいの遅れを感じ、海外動向を常に見なければならぬと強く思ったのが、国際連携に関わり始めたきっかけでした。

その後、国際会議だけではなくビジネス会議にも出るようになると、より小さなコミュニティになり、お互いの顔が見えるようになってきました。2009年のCOARの設立会議では、土屋俊先生がPeter Burnhill氏と対等に議論している姿がカッコよくて、今でもよく覚えています。英語でも内容でも追いつかないことを感じて悔しかったし、こうなりたいと思いました。

Q そもそもどうして国際連携が重要なのでしょうか？

日本が遅れている部分が多いことは明らかで、海外から継続的に学ぶことが大切です。オープンアクセスやオープンサイエンスに関する海外のプロジェクトを俯瞰して、頭の中に地図を作り、日本として、NIIとして次に何をしていくかを考えていく必要があります。それはJPCOARも同様で、次期戦略はしっかり海外事例に学んで立案するべきです。若手から上司に企画立案してもらうために、JPCOARでも戦略策定や情報収集のための海外出張の機会があると良いと思っています。

日本は後追いのメリットを活かして、海外の失敗を学んで先行していける部分があります。アジアに貢献し、欧米にフィードバックして、アジアのコミュニティを欧米に連れていく。こういう成功パターンを認証（学認）の世界で経験しており、リポジトリでも実践し、日本の存在感を示していこうと狙っています。

欧州からスタートしたCOARが参加地域を広げて国際コミュニティとして成熟していきなかに、2018年にVice-Chairpersonに就任し、今回で2期目を務めることになりました。国際連携は、海外に行く、参加するという所から始まります。次に、勇気を持って発言する、

作業に関わる、最後にコミュニティの運営に関わる、と進んでいきます。DRFの頃からCOARに関わってきましたが、より中核に関わってこそ意味があるものです。お客さんではなく、コミュニティの一員になるために、より内部にまで関わりたいと考えています。オープンサイエンスの時代になって、中立的なオープンインフラ（SHERPA/RoMEO、OpenDOAR、Zenodo、arXiv等）を国際的に協力しながら長期的・持続的に運用していくという世の中になってきています。日本はこれまではただ乗りしてきたことが多かったのですが、インフラの運営に参加して貢献する、あるいは日本からオープンインフラを発信していくべきだと思います。

Q 国際連携で大切なことは？

海外で得たネットワークを途切れさせないことが大切です。会議でのコミュニケーション、会話、食事、と段階を踏んで繋がっていきます。国際会議とは違い、COARのようなビジネス会議では発言する機会がたくさんありますが、仲良くなるのには時間がかかるので、3～4年かけて、10回くらい参加してダイブする体験が必要だと思います。本当はNIIとしてもそのくらい投資して、国際連携で日本の顔となるスター図書館員の育成に貢献したいと考えています。ジョブローテーションがあると、そのネットワークを維持し、ディスカッションを重ねていくのは大変なのですが、それを維持するため



にきちんと時間を割くのが大切だと思います。こういったことに理解のある管理職のいる組織だと、良い人材が集まるかもしれないですね。

ネットワーク作りのために、帯同した若手には私の立場やネットワークをうまく使ってほしいのです。ジョブローテーションがあると海外の人と長く親密に付き合うのは難しいでしょうから、私がコミュニティの内部に一気に連れていくことで、充実した経験をして、帰国後も関係を続けてもらいたいですし、お客さんとして話を聞くだけではなく、海外のコミュニティメンバーと一緒に作業する・食事する・苦楽を共にするなどの楽しい経験をしてもらいたいと思います。ただ仕事をするだけでなく、面白いからやると言える関係性を築いてほしいです。共に食事するような関係になれば、同じ目標を持って真剣に取り組んでいる人たちと経験や考えを共有したり、議論したりできます。そうなるのが楽しみです。

私も一緒に仕事をする人とは仲良くなることが多いです。温度感が合い、落ち着くような関係になり、特に用がなくてもWhatsAppでチャットしています。会議等で意気投合したり、新しい企画を立ち上げたのがきっかけとなり、そこからずっと仲良くしている人もいます。JPCOARでも、COARで新しい企画を提案・実行するというチャレンジがあっても良いと思います。一緒に仕事をする機会は、より仲良くなるチャンスです。

Q 英会話に苦手意識があるのですが……

研究者として学会に参加する会話と、コミュニティのビジネス会議に参加する会話では、必要な英語が随分異なるので、私もかなり勉強しました。

コミュニケーションには慣れが必要です。そのためにAsia OA（年1回開催されているアジア地域の国際会議）を活用してほしいです。ノンネイティブなコミュニティでは、みんなそれほど英語が上手ではないので、抵抗感が少ないと思います。日本人は控えめですが、間違ってもいいからとにかく会話にすると相手は理解してくれようとしします。大きな学会より、COARのような小さなfamilyがよいと思います。

私は英語の勉強のために、動画のサブスクサービスで一日の終わりに英語のドラマを一話見ることを続けています。ブラウザの拡張機能で日英字幕を付けることもできます。流して見るのではなく音を拾うように意識すると単語も聞こえてくるようになります。バイクでの通勤時に英語で独り言を言うなどのシミュレーションもしています。

Q COVID-19が国際連携に与えた影響

COVID-19により海外出張ができなくなりました。インターネット

で繋がっており、オンライン会議でも開始時間前に接続して雑談するようにしています。ですが、実際に会わないとダメだと感じています。圧倒的に密度が違います。国際連携で重要なのは仲良くなることだと話しましたが、それが難しくなっています。会って共に時間を過ごすのがやはり重要だと感じますね。

海外出張して国際会議を幅広く聴講する機会が少なくなりました。出張すると現地ですべて会議を聞き、夜は食事しながら議論することができるのですが、オンラインでの参加では興味のある特定のセッションのみになってしまい、勉強の機会が減っていると感じます。この状況でも進んでいる海外機関と比べると、日本は遅れを取っていることを危惧しています。

Q 最後に、若手へのメッセージをお願いします！

国際連携の前にまず学ぶことです。JPCOARの皆さんは海外のメーリングリストやブログを読んでいますか？ 勉強して海外との違いをひしひしと感じてほしい。外を見て、何かやりたいと思ってほしい。どうにかしないといけないと自分の問題にしてほしい。負けないくらいの日本の地力を作してほしい。そのためには国際連携しなければならなくなります。

自分のやりたいことを通すために、風が吹いてチャンスが回ってくるまで諦めずに上司をしつこく説得しつづけたり、自分の考えを色々な方法で外部に発信して行ってほしいです。その結果、自機関の中でも図書館の価値が上がっていくはずです。

若手にはとんがったまま大きくなってほしい。突っ込みに負けず、引いて考え、突っ込んでくる人に対してはある領域で優れていようと思ってほしい。とんがった、かっこいい図書館員がもっといいと思います。上司には、若手がJPCOARの活動に工数を割くことに理解を持ってほしいです。JPCOARの活動がもっと面白くなっていくことを期待しています。

NIIとしてもそんな若手をバックアップしたいと思っているんです。例えば、NIIでのびのびと充実した経験を積んで、大学に戻ってそれを活かして仕事ができるというような制度を作りたいと思っています。NIIは自分のやりたいことを提案して、実現して、全国展開するための窓口の一つだと思ってほしい。控えめになる必要はありません。NIIを、若手が自分のやりたいことをやるために目指す場所にしていきたいです。

インタビュアー・インタビューまとめ

林 豊（国立情報学研究所・コミュニティ強化・支援作業部会）
インタビュアー

大園 隼彦（岡山大学・同作業部会）

熊崎 由衣（日本原子力研究開発機構・同作業部会）

南雲 修司（東京工業大学・同作業部会）

山地先生には、国際連携から始まり仕事論などにも話が広がりつつ、2時間にもわたってお話を伺うことができました。刺激的な時間をどうもありがとうございました。最後に国際連携活動に関わっていきいたいという若手に対して熱いメッセージをいただきました。関心のある方はぜひJPCOAR作業部会への参加をご検討ください！（2022年度の作業部会員募集開始は4月頃を予定しています。）



報告: Open Access Week 2021の振り返り

2021年もオープンアクセスウィーク（Open Access Week: OAW）が10月25日（月）～31日（日）に開催されました。OAWは、2008年にアメリカSPARCと学生コミュニティによって立ち上がり、以後、毎年10月に開催されているイベントです。

2021年のテーマは「It Matters How We Open Knowledge: Building Structural Equity／いかに知識をオープンにするか：構造的公平性の構築を目指して」でした。JPCOARでもOAWを盛り上げるために、OAW2021の[特設ページ](#)を作成し、以下の取り組みを行いました。

オリジナルポスターの提供

機関を問わず共通で使えるものと、機関名等を入れてアレンジしてもらうものの2パターンを提供しました。

事例紹介

各機関で行われているOAWの取り組みをメーリングリストで募集し、情報提供いただいた機関の取り組みについて特設ページで紹介しました。

素材集の提供

OAWに特化したものではありませんでしたが、Web会議で使えるバーチャル背景を提供しました。

SNSでの情報発信

情報提供いただいた機関以外にも、FacebookやTwitterでOAWについて情報発信している機関はたくさんありました。それらをJPCOARのFacebookでシェアしたり、TwitterでリツイートしたりしてOAWの情報をまとめて見るができるようにしました。

情報提供いただいた機関のみなさま、ありがとうございました！これからも継続してオープンアクセスの重要性を伝えていきたいです。

栗田 とも子（北見工業大学・コミュニティ強化・支援作業部会）



オリジナルポスター



大阪市立大学ポスター



北見工業大学展示



千葉大学マスクケース



バーチャル背景



参加報告: COAR 2021 Annual Meeting and General Assembly

2021年9月29日から3日間、COARの年次総会がオンラインで開催されました。私はそのプログラムの1つとして設けられた「Approaches to Adopting Good Practices in Repositories」において、JPCOARの活動紹介をしましたのでその様子を報告します。

このセッションでは「リポジトリの評価基準をめぐる最新動向」をテーマとして、リポジトリを運営するコミュニティが参照すべき評価基準や、それが実際の運営業務に及ぼす影響について、4名の登壇者が発表しました。

Gail Steinhart氏（Cornell University）はデータリポジトリの品質を評価する既存の基準を紹介し、FAIR原則に照らしながらそれぞれが備える評価の観点の比較を行っていました。Evelin Arust氏（University of Tartu）からは、CoreTrustSealが示す要件に自機関のデータリポジトリ（DataDOI）を照合した結果と、その結果を参考に改善した事項（例えば、データリポジトリの果たすべき使命の明確化や、分野の特性等を考慮したデータ登録申請フォームの更新など）の説明がありました。Gultekin Gurdal氏（Izmir Institute of Technology）からは、トルコにおけるオープンサイエンスの進捗や課題と合わせて、Council of Higher Educationが国内のリポジトリ

に求める機能・運用要件が紹介され、COARが作成した評価フレームワークのトルコ語への翻訳も進めているとの報告もありました。最後に私からは、前述のCOARが作成した評価フレームワークの日本語への翻訳と、それをベースにした具体的なチェックリストの作成過程について、JPCOARのタスクフォースが取り組んでいる活動の紹介をしました。

国境や分野を越えて人々が学術情報を利用する現在、その流通プラットフォームであるリポジトリは各設置機関固有の特徴を認めつつも、統一的・標準的な機能やサービスの提供が求められるのではないのでしょうか。そうした状況において今回のテーマで取り上げられたグローバルな評価基準は、自機関のリポジトリを客観的な観点で自己点検できるツールとして活用できるものと考えます。私自身も引き続きこうした動向や実践に関心を払い、自機関のリポジトリを通じた学術情報流通の促進に貢献したいと思います。

最後になりましたが、プログラムの[資料](#)・[動画](#)は公開されていますので、ご関心のある方はそちらもご覧ください。

菅原 光（一橋大学附属図書館・コンテンツ流通促進作業部会／COAR community framework検討タスクフォース）



JPCOARオープンアクセスリポジトリ戦略2019～2021年度の振り返り

「[JPCOARオープンアクセスリポジトリ戦略2019～2021年度](#)」の最終年度となりました。期間中の各作業部会の活動を振り返ってご報告いたします。

研究データ作業部会

研究データ作業部会では、主に①研究データ管理（RDM）に関する教材作成、②データベースレスキュー、③RDM事例形成、④大学ICT推進協議会研究データマネジメント部会（AXIES-RDM部会）との連携活動に取り組んできました。

① 研究データ管理（RDM）に関する教材作成

2020年10月に研究者向け教材として「[研究者のための研究データマネジメント](#)」を公開しました。本教材は対象を研究者とし、研究者が短時間で受講できるように12のテーマに分割しております。また、2021年2月には研究支援職員向け教材「[研究データ管理サービスの設計と実践](#)」の改訂版を公開しました。こうした教材のアップデート作業は引き続き行っていく予定です。さらに、研究者向け教材を土台にして、AXIES-RDM部会が情報基盤スタッフ向けに教材を作成中で、2022年中には公開できる予定です。

その他、国立情報学研究所（NII）のラーニングマネジメントシステム「学認LMS」上で、本教材が受講できるように、試験運用の実施、理解度確認テストの作成等の協力を行っており、2021年6月から正式運用されている学認LMSで提供されています。

② データベースレスキュー

過去に研究者等が公開していたデータベースのうち、維持困難なものが多数存在し、機関リポジトリ等がその受け皿になれないかとい

う問題意識の下に進められたプロジェクトです。2019年には作業部会員が所属する各機関の事例を収集し、2021年4月に「[データベースレスキューマニュアル ver.1.0](#)」を公開しています。

③ RDM事例形成

AXIES-RDM部会と連携して、18機関に協力していただいているプロジェクトです。年2回程度のミーティングで研究データに関する取り組みの情報交換を行い、2022年には各機関の事例を公開する予定です。

また、2020年11月～12月に、国内の各機関に対し研究データ管理の取り組み状況調査を実施し、352機関から回答をいただきました。2021年4月にその集計結果を「[2020年度RDM事例形成プロジェクト中間報告書](#)」で公開しております。2021年には、科学技術・学術政策研究所（NISTEP）と集計結果の共同分析を行っており、その結果も近々報告させていただく予定です。

④ AXIES-RDM部会との連携

AXIES-RDM部会と連携を強化するために[AXIES-JPCOAR研究データ連絡会](#)を立ち上げ、これまで紹介した取組の他に、各種ワークショップの開催、「[大学における研究データポリシー策定のためのガイドライン](#)」の用語集作成の協力等を行っています。

主査 結城 憲司

人材育成作業部会

人材育成作業部会は、新型コロナウイルス禍の影響をもっとも強く受けた作業部会のひとつでした。

従来、オープンアクセス新任担当者研修（旧称機関リポジトリ担当者研修）を東西で行っていましたが、直近2年間は集合研修の開催が難しく、オンラインでの開催としました。集合開催の大きな利点のひとつは、参加者同士が知り合いになって、座学内容に留まらず、自分が業務上悩んでいることについて別の機関から参加している他の参加者に「そちらではどう？」と相談したりできること。集合研修の機会には、グループ別にそのような話ができるコマを設けたり、夕刻に情報交換会を開催したりしてきましたが、オンラインではなかなか難しい。2021年度はオンライン会議システムのグループ分け機能を用い、短時間ですが少人数セッションを試しました。オンライン会議システムは、ひとりがしゃべっている間に他の人がなかなか口をはさみづらくダイレクトな反応ができなかったり、話す側も聞く側も相手の感触がつかみづらかったりとリアルなコミュニケーションには及ばないところがありますが、それでも他機関の人と直接に話ができる機会として、参加者間のコミュニケーションをなんとかうまくできるようにしていきたいと思っています。

そうした課題はあるにせよ、研修のオンライン開催は、どうしても会場収容人数の制約のあるリアル開催とは比べものにならないほど多くの方が視聴してくださいました。オープンアクセス新任担当者研修よりも幅広い内容を取り扱うセミナーとしてJPCOAR Monday（2020年度）、月刊JPCOAR（2021年度）も企画・実施しました。こちらも同様に多くの方が参加くださいました。参加者アンケートでは「出張が発生せず参加しやすい」という声が多く寄せられました。今後もオンラインでという希望もありますので、この開催方式を定着させていくことになるでしょう。このことは世の中のものなにもかもが不可逆の変化の途上にあることのあらわれのひとつだと思います。大学教員からは、「以前は外国の同じ分野の研究者と議論するために、数か月をかけて海外出張を準備したものが、Zoomなどで随時会話することが普通になって、研究のリアルタイム性が増している」というような話も聞きました。私たちは、機関リポジトリの機能や運用を、数年来指向されている研究過程そのものをオープンに共有していこうという潮流にフィットしたものにいいよしていかなければならないと感じています。

主査 杉田 茂樹

コンテンツ流通促進作業部会

コンテンツ流通促進作業部会は、戦略2「オープンアクセスを推進する学術情報流通の基盤を整備し、コンテンツの流通、活用を促進する」を担当する部会として設置されました。戦略2の課題は多岐にわたりますので、チームに分かれて活動してきました。

① コンテンツ収集の調査からワークフローシステムの開発

2019年度は17機関にインタビュー調査を行い、IRDB やUnpaywallのデータ分析とあわせてオープンアクセスの状況を把握しました。これを受け、ワークフロー改善の試みとして、NIIによるコンテンツ登録アシスト機能の開発に協力し、2020年度は作業部会員による実証実験、2021年度は5機関の協力を得て実証実験を行っています。

② 著作権ポリシーデータベース（SCPJ）の移行とデータメンテナンス

初年度の2020年3月にSCPJを筑波大学からJPCOARに移行しました。2020年度は約10年ぶりに学協会宛にデータの更新を呼びかけてデータ整備を行い、2021年度に[SCPJデータメンテナンス結果報告書](#)を公表しました。現在、サイトの英語化を行っています。

③ メタデータのスキーマ普及から次期改訂へ

2019年度はJPCOARスキーマ策定後の引継ぎ課題となっていた[JaLC DOI登録のためのガイドライン](#)を作成しました。小幅な改訂をしながら運用を軌道に乗せ、メタデータスキーマの維持管理を行っています。現在は、国内関係機関と協議しつつ、デジタルアーカイブ・研究データ対応のために、JPCOARスキーマVersion 2.0策定方針を検討しています。

④ 識別子とライセンスの調査・普及活動

2020年度にIRDBのデータを分析し、識別子とライセンスの付与状況の調査を行いました。2021年度はその結果を踏まえて、各大学への周知活動と10大学へのインタビュー調査を行っています。それらの成果をまとめ、広報・普及をしていく活動中です。

⑤ JAIRO Cloudの移行サポート

当初2020年4月に予定されていたJAIRO Cloudの移行のサポートを行うため、2019年度は17機関の協力で移行実験を行い、2020年度にはβテストに全面協力するなど、JPCOARとNIIとの共同運営体制の中で、大きな役割を果たしました。開発の遅れから予想外の展開となり、現在は次期JAIRO Cloud移行タスクフォースに分離・継承されています。

私たちの作業部会に所属した方は3年間で総勢31名です。調査を通じて方策を考え新しい実践に挑戦する活動と、必要なツールを維持していく地道な活動のそれぞれに多くの成果を出してきました。調査や実験に協力いただいた機関も含め、皆様の奮闘の賜物です。私たちの活動は、オープンアクセスの基盤を支え、リポジトリの力を高めるものであり、その多くは次期の活動に繋がっていきます。もっと多くの会員の皆様に活動に参画してもらいたいと願っています。今後もリポジトリ・コミュニティの力を結集していきましょう。

主査 高橋 菜奈子

コミュニティ強化・支援作業部会

コミュニティ強化・支援作業部会の活動根拠となる戦略は、「3. オープンアクセスリポジトリを支えるコミュニティとしての機能を強化する」です。コミュニティの機能強化とは、平たく言えば、JPCOARというコミュニティをさまざまな面から盛り上げようという活動であり、当部会はその盛り上げ隊として、2019年度からの3年間、次のような活動を行ってきました。

【情報発信】ウェブサイト・SNSの随時更新、広報誌CoCOARの発行、ポスター出展、パンフレット・Brand Identityツールの作成等。

【情報共有】コミュニティツールの導入と運営、イベント（図書館総合展・地域ワークショップ等）の開催、オープンアクセスウィークの展開等。

ウェブサイト・SNSは、部会員全員で当番制として迅速性を重視するとともに、OAツールの紹介等有用な情報の掲載の企画も行っています。CoCOARは現在までに14号を発行。活動報告のみならず、会員機関のグッドプラクティスの紹介やカレントな話題のピックアップ、座談会、書評など、企画から編集・発行まで数か月を要する、部会の中でも大きなウェイトを占める業務です。

コミュニティツールは、会員相互のコミュニケーションおよび

JAIRO Cloudコミュニティサイトに代わる情報共有の手段として、前身の広報普及作業部会の頃からの懸案となっていました。試行錯誤の結果、オーソドックスなメーリングリストに落ち着きました。運用開始から1年が経ち有益な投稿も多い中で投稿への敷居が高いという声も聞き、部会内で運用の工夫をしているところです。

これらのさまざまな企画の実現にあたっては、運用指針やガイドライン、フローの検討など、制度設計を経て軌道に乗せ、さらにその維持管理をしていくために、部会員たちの日々の努力があることを（手前味噌ながら）申し添えておきます。

JPCOARはいまや680機関を超える巨大なコミュニティとなり、顔の見える細やかなサポートには至らないことが多いかもしれませんが、これからもっと身近に感じられるコミュニティへと成長していくために、次期活動計画の中でも強化策をうたっていくことを考えています。コロナ禍による制約も踏まえた新たな展開の中で、会員機関の皆さんと一緒にJPCOARを盛り上げていきたいと思っています。

主査 尾崎 文代

作業部会員の活動紹介

次期JAIRO Cloud移行タスクフォース

次期JAIRO Cloud移行タスクフォース（以下「TF」）は、次期JAIRO Cloud（WEKO3）への移行作業を支援することを目的としています。

設置目的に「協会が国立情報学研究所と共同運営するJAIRO Cloudについて、次期JCへの移行作業に伴い、会員間並びにJC利用機関間の相互支援を強化することを目的とする。」とあり、JCはJPCOARと国立情報学研究所（NII）との共同運営であり、TFでは、特に、メーリングリストによる問い合わせ対応や移行に関する動画作成、勉強会を担当しています。また、次期JCの基本的な機能については次期JC移行TFで動作検証を行っています。

会員からの問い合わせは、JPCOAR JAIRO Cloud Community MLというJCのユーザーサポート・相互協力用メーリングリストに投稿いただくことになっていますが、ここに投稿された問い合わせは、課題管理ツールに自動登録され、TFでは回答の可否、開発側へ問い合わせるかどうかの検討、回答案の作成などを行っています。

JCは、先述のとおり、JPCOAR会員・JC利用機関とNIIとの共同運営によって成り立っています。メーリングリストも、質問→回答という一方通行ではなく、会員・利用機関同士が相互に情報交換や、運用の支援を行うことを本旨としています。TFは、移行作業や、システム上の詳細などについて、利用機関の目線にたち、会員・利用機関相互のコミュニケーションを支援しています。

残念ながら、JCの移行は延期中であり、会員・利用機関のみなさんにもご心配、ご迷惑をおかけしているかと思いますが、早期に次期JCに移行することは今後オープンアクセスリポジトリを推進する上で必須です。極力円滑な移行を進めるためにも、みなさんのご協力をお願いします。

本TFは今年度2021年度限りで設置されたものですが、移行にはもう少し時間が必要ですし、会員・利用機関の相互支援はずっと続き、活動を継続していく必要があります。この活動自体は、繰り返し申し上げているとおり相互支援ですので、特段高度な知識やスキルは必要ありません。これをお読みの皆さんはすでに何等かのカタチで、リポジトリの運営、運用に関わっている、あるいは関わったことのある方、関わりたいと思っている方かと思いますが、ご経験の長い短いはあると思いますが、そのご経験を役立ていただくために、JCの運用相互支援にご参加ください。

最後になりましたが、実際にTFに参加しているメンバーからのコメントを2つ紹介します。

① 他大学や他機関の方と組織の枠を超えて、共有の課題に取り組む、その成果が何らかの形でJPCOAR会員に還元されていくというところにやりがいを感じます。他大学や他機関の方の仕事ぶりや発言からもいろいろと学ぶことも多々あり、自分自身の成長に役



立っていることを実感します。TFや作業部会のお仕事をとおして知り合いになった方々とのネットワークも自分の図書館員としてのキャリアの中で財産のように感じます。また、作業部会では一人に負担がかからないような仕事の分担、配慮は十分にされていますが、自分の業務と作業部会の繁忙期が重なると大変なこともあります。その場合でも、自分でそれぞれをうまくこなせるように仕事のやり方を工夫したり、優先順位を考えたりすることにより自分の仕事のやり方を考える良い機会になると思います。ぜひみなさまも作業部会を経験されることをお勧めいたします。

上原 藤子（沖縄科学技術大学院大学）

② JAIRO Cloud移行プロジェクトでは、NII始め様々な立場や役割を担っている方々と協力・連携して作業する必要があります。多くの方と共同で作業するにはそれぞれの役割分担やルールを決めて行う必要があります。小さな機関で仕事をしていると、一人で解決する・せざるを得ないタスクが多いため、独りよがりな作業になりがちです。このTFに参加することで、仕事の方法やタスクを分析する力が少し身についたように思います。所属機関でも部署を超えた作業が控えており、このTFでの経験を自機関に還元したいと考えております。先行移行機関の方々もTFメンバーとして参加しています。色々トラブルはありますが、何に問題があってもどうすれば解決できるか、何を先に解決しなければならないのか、共に知恵を出し合って作業しています。図書館業務においては大きな変革期を迎えており、この重要な時期にいろいろな方々と作業できることを感謝しています。特に将来を担う若手の方には是非このような経験を味わっていただきたいです。

加川 みどり（神戸松蔭女子学院大学図書館）

小野 亘（東京大学・次期JAIRO Cloud移行タスクフォース主査）

作業部会員の活動紹介

コミュニティ強化・支援作業部会

本作業部会では、リポジトリコミュニティの活性化のため、広報・情報共有を進める活動を行っています。具体的にいくつか挙げると、いまお読みいただいている情報誌CoCOARの企画・制作、Webサイトの企画・更新作業、イベントの運営・協力（例：図書館総合展、月刊JPCOAR）、メーリングリストの運用などです。私が作業部会員になったのは、入職1年目からです。機関リポジトリは、私が利用者だった学生時代に卒業論文のための調査や論文の執筆を進めるうえで不可欠な存在でした。本務は目録業務だったのですが、リポジトリにはかねてから関心があったことがきっかけで、本作業部会の尾崎主査（当時岡山大学附属図書館）からお誘いいただきました。

コミュニティ強化・支援作業部会の業務は、先述のように（リポジトリの専門的・技術的な業務というよりは）総務や広報のような案件が中心です。一方で、イベントの運営やCoCOARの制作などでは、専門的・技術的な話題に触れることもあります。基本的には裏方として関わることにはなりますが、情報が入りやすい環境に身を置くことは、日々の学びにも繋がっています。

これまでの活動では、「[おすすめのOAリソース](#)」の立ち上げに関わりました。背景には国内で新型コロナウイルスの感染拡大があり、JPCOAR運営委員会が「[COVID-19以降の社会に向けたオープンアクセスの加速について](#)」を発表したことがあります。掲載する情報の収集と公開後のメンテナンス作業を続けることで、リポジトリを活用している様々なサービスについて理解を深められました。メンバーとともにアイデアを出し合い、ページを完成させたことはモチベーションにつながりました。月刊JPCOARで講師として発表する機会もいただき、良い経験になりました。作業部会員の業務に関心がある方は、作業部会での仕事の進め方について気になっていらっしゃるかもしれません。普段の状況をお伝えすると、JPCOARではBacklogというプロジェクト管理ツ

ルを活用しています。進めている業務を「課題」として登録して、同じ作業部会に所属しているメンバーとコメントを交わしながら進めます。また、メンバーは本務と並行して作業部会に参加していますので、本務の繁忙期には対応可能なメンバーと協力して作業を進めることができます。月に1度のミーティングはオンラインで開催しており、遠方へ移動することなく活動に参加できます。一利用者としての興味からのスタートでしたが、今では微力ながら、リポジトリコミュニティへの支援に関わっていることを嬉しく思います。これをお読みの方も、ぜひ作業部会への参加をご検討ください。一緒にリポジトリコミュニティを盛り上げていきましょう。

植山 廣紀

（岡山大学附属図書館・コミュニティ強化・支援作業部会）



▲ JPCOAR Newsletter: CoCOAR

メンバーが交代で編集・執筆を行います。13号にも作業部会員の活動紹介を掲載しております。併せてご覧ください。

2022年度作業部会員の募集は、2022年4月頃に行います。JPCOARウェブサイト及び会員機関宛てのメールにてお知らせいたしますので、ぜひ参加をご検討ください！

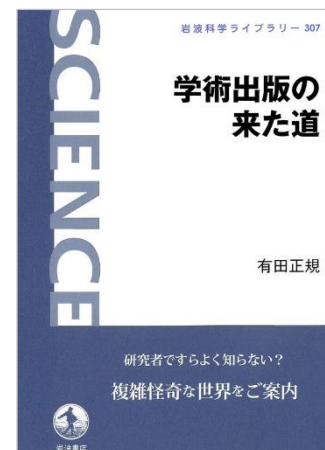


書 評

学術出版の来た道

有田 正規 著

岩波科学ライブラリー307, 岩波書店, 2021
ISBN: 978-4-00-029707-3



グリーン・オープンアクセス（グリーンOA）の意義を説く寓話や戯画の類はどれもちょっと桃太郎の話に似ている。桃太郎は乱暴をはたらく鬼を征伐するが、鬼の側の事情は語られないという点だ。だが鬼には鬼の言い分というものもある。

言い分同士が衝突したら、どうすればいいか。まずは相手の言い分に耳を澄まし、その言い分が一体どこから生まれてきたのか、それが来た道をあきらかにすることである。だが、ことOAに関して、私はそのような知的態度を採ってはこなかったと今更ながら反省している。グリーンOAが採用する桃太郎的な勧善懲悪の話型にどっぷりと安住してしまったことを、である。

本書はそんな思考停止に陥った私のようなもぐりOA主義者を、鬼ヶ島というアウェーに連れて行ってくれる本である。それも征伐目的ではなく、歴史探訪ツアーとして。

もちろん学術出版の歴史を紐解く書物や論考は世にあまたあるだろう。本書の出色は、過去4世紀にわたる学術出版史を俯瞰しつつ、実際にそこに生きた人々のドラマティックな群像劇として描き出している点である。

私たちは、17世紀に繁栄したエルセフィア出版のネームバリューを利用して、エルゼビアを興したロバースや分冊化（研究分野の細分化・深化による論文数の増大）により事業を軌道に乗せたラマルクの物語、ナチスの民族浄化政策を生き延び、見事事業を再生させたフェルディナンド・シュプリングラーの物語などなどに引き込まれることになる。

なかでも両社の窮地に燦然と現れた救世主として、本書において最も紙数を割いて語られる人物がいる。かのメディア王、ロバート・マクスウェルその人である。著者はなぜこの男に注目するのか。それは彼こそ、今日私たちが直面している学術雑誌の価格高騰の火付け役と目されているからだ。学術出版ビジネスを通じて彼が大富豪に登りつめた理由について、著者が縷々列挙する中で私が個人的に興味を持ったのは、彼のブランドづくりの巧みさである。

業界の新参者だった彼は、風雲児らしく学術出版の伝統をこわしていくが、自分が興した出版社ペルガモンのブランディングについては、ちゃっかり「老舗の出版社」らしさにこだわった。この点は、エルセフィアの威光にすぎたロバースと同じだろう。ルイ・ヴィトンやエルメス同様、学術出版業界のブランドも伝統がずいぶんものをいうらしい。

ところで、私はまた「査読」について書かれた章の、ある一文が気になった。それは「伝統」の側に属する『Nature』や『Science』が、投稿論文の8割以上を編集部で却下しているという記述である。もし学術誌の価値が査読の質ではなく、大胆な却下率の方で決まるのだとすれば、これもまたブランディングのなせる技だろう。

この点について、ちょっとタイムリーな余談がある。私は最近大学の教員とコラボし、県内の地場産業から出る余剰品を素材にした造形ワークショップ事業に取り組んでいる。私の住む兵庫県加古川市は靴下の三大産地のひとつであり、私の知人にも古くからの繊維会社を営む者がいる。そこで先日私はこの知人を訪ね、意気揚々と余剰品の提供を打診した。ところが、結果はノーだった。この会社はOEM（他社ブランドからの受託製造）であり、余剰品を横流しするなどご法度だというのである。ブランド側による監査は厳しく、余剰品・端材の類はすべて相当なコストをかけて燃やしているらしい。

伝統的商業出版社の高い却下率を、私はこの余剰品の焼却とだぶらせてしまう。「それがブランドを扱うということだから」知人が言い残したこの言葉が忘れられない。

本書を通じて、私が随所で思い知らされるのも、このブランドを前にした無力感である。

本書の後半で紹介されるOAの展開。これを、私はブランド抵抗史として読んだ。ブランド力のある競合誌刊行を目指し、商業主義への対抗を試みたSPARCから、軽量査読という手法で、（高い却下率により稀少性を生み出すという意味の）ブランディングとは真逆の戦略を採るPLOSのOAメガジャーナル、それに商機を見たブランド側による「カスケード査読」（“一流誌”を却下された論文がブランド内の“二流誌”に回されるという、アウトレットモールみたいな市場）という応酬などなど、これまでキーワードとしてはよく聞き及んでいた同時代的な出来事の数々が、歴史の縦糸を通すことで有機的なつながりをもつストーリーとして浮かび上がってくるから面白い。

一体、この闘いに結末は来るのだろうか。

著者がマクスウェルの言葉を引きながら言うように、問題の根元に絶えざる「出版需要」があるのならば、「鬼」はアウェーではなくホームにあるのであり、ならば、グリーンロードを行く我々の仕事は、このアカデミア側の欲望を幾分でもぐらつかせること。ブランドロゴが付こうと付くまいと「靴下」の品質は何ら変わらないはずなのに、うっかりすると燃やされてしまいかねない市場（Publish or perish）に、それを委ねることが本当に健全な姿なのかという問いを、各々のアカデミアのなかで地道に膨らませていくことではないのだろうか、改めて沸々と感じながらこの本を閉じました。

永井 一樹（兵庫教育大学）

気になる話題を

Pick Up!



機関リポジトリにおけるPDFファイルの取り扱い

[JPCOAR-Comm:131] 情報提供のお願い:PDFファイルの取り扱い(12/24㍻切) ほか69件

Q

安形輝、宮田洋輔、池内淳「日本の機関リポジトリにおけるPDFファイルの長期保存とアクセシビリティ」[1]（以下、CA2004）で、以下のような調査結果が報告された。

4. まとめ（抜粋）

日本の機関リポジトリにおいて公開されたPDFファイルについて、（1）PDF/Aという長期保存に適した規格で作成されたPDFファイルはほとんどなかったこと、（2）30.5%のPDFファイルが暗号化されており、アクセシビリティの観点から問題があり、将来的に他の形式への変換が阻害されていること、（3）多くのPDFファイルは、機関リポジトリのメタデータから独立して流通する際の十分なメタデータが埋め込まれていなかったこと、の三点が明らかになった。

そこで、リポジトリ業務の実態を探るため、JPCOAR会員におけるPDFファイルの取り扱いについてJPCOAR Community MLで尋ねることとした。調査期間は2021/12/6～12/24で、PDF/Aに絞って以下の問いかけを行った。

○ コンテンツをPDF/Aファイルで登録していますか？

1.登録している場合

1-1. どういった場合／コンテンツに行っていますか。（例：学位論文など特定の資源タイプのみ、201X年以降の全コンテンツ、など）

1-2. 登録し始めた理由やきっかけを教えてください。

2.登録していない場合

2-1. 登録していない理由は何ですか。（例：PDF/Aファイルのことを知らなかった、必要だと考えていない、など）

2-2. 今後PDF/Aでの登録やその検討をしますか。

○ その他、PDFファイルの登録に関して行っている取り組みがあれば教えてください。



A

66機関から回答をいただいた[2]。その内容を簡単に紹介する。

1-1への回答の多くは特定のコンテンツ（学位論文、自機関刊行物）のみを対象としており、なかでも博士論文が主であった。これは国立国会図書館がPDF/Aでの提出が望ましいとしていること[3]が理由である。1-1にはPDF/Aに変換して登録している機関と、著者等にPDF/Aでの提出を推奨している機関がある。後者では、著者向けのマニュアルを作成しているとの情報提供があった。他に、1-2ではシステムリプレイスやCA2004を契機として挙げている機関があった。

2-1への回答の多くは、PDF/Aでの登録の未検討や知識不足であった。他に、カバーページを自動付与するシステム上の理由や、著者から提出された原稿ファイルをそのまま登録するという方針、暗号化等の他の処理を優先するという業務・運用上の理由が挙げられた。また、PDF/Aに変換するコストとベネフィットからの判断、PDF/Aの長期保存性への疑義のためメタデータの入力を優先するなど、検討の結果行わないという機関もあった。

2-2では、情報収集する、博士論文については検討するといった回答が多く寄せられ、今後はPDF/Aでの登録を開始するという機関も僅かながらあった。一方、登録必須となった際に検討する、あるいは業務体制等により対応できないという意見も寄せられた。

また、その他の取り組みとして、PDFファイルにメタデータ（著者、所属、DOI等）を入力する例、OCRによるテキスト付与の例が紹介された。暗号化については、出版社から改変禁止等の条件を提示された論文の著者版を登録する場合や著者等にセキュリティを施したい意向がある場合、また改変を防ぐために行っている、とのことである。

著者以外がPDF/Aに変換する際の留意点も挙げられた。PDF/Aは長期保存とアクセシビリティ確保のため、フォントの埋め込みが要求される。PDF/Aに変換する際に原稿作成環境（著者のPC）で用いたフォントが元となるPDFに埋め込まれておらず、かつ変換環境（例えば図書館のPC）にない場合に、異なるフォントが埋め込まれて異版ができてしまう。そのため、提出前のフォント埋め込みや原稿作成環境でのPDF/Aへの変換ないし作成が必要ではないか、という指摘である。実際、PDF/A変換を行っている機関からは、変換エラーの場合はそのまま登録しているとの回答もあった。

年末のお忙しいところご協力くださった各機関に御礼申し上げます。

JPCOARでは①JPCOAR Community ML(協会の活動や会員機関相互の情報共有)、②JPCOAR JAIRO Cloud Community ML(JAIRO Cloudのユーザーサポート・相互協力用)の2つを運用しています。本企画には、MLを盛り上げたい！というコミュニティ強化・支援作業部会の思いもありました。投稿には勇気が要ると感じるかもしれませんが、そのメールが誰かのヒントになるかもしれません。気軽に情報・経験を共有しあって、皆でリポジトリや業務をより良いものにしていきましょう！PDF/Aの続報もぜひご投稿ください。なお、本記事で言及した投稿はMLのアーカイブ[4]よりご覧いただけます。

熊崎 由衣（日本原子力研究開発機構・コミュニティ強化・支援作業部会）

[1] 安形輝, 宮田洋輔, 池内淳.“日本の機関リポジトリにおけるPDFファイルの長期保存とアクセシビリティ”. カレントアウェアネス. 2021, (349), p.9-11. 入手先 <<https://doi.org/10.11501/11727158>>, (参照 2022-02-14).

[2] 1に相当する回答があったのは17機関、2に相当する回答があったのは53機関である。1と2が排他的でなく両方に回答があったため（例えば、特定のコンテンツのみPDF/Aとし、それ以外は特に対処をしない場合に両方に回答できる）、機関数より回答数が多くなっている。

[3] 国立国会図書館.“国内博士論文の収集”. (オンライン), 入手先 <<https://www.ndl.go.jp/jp/collect/hakuron/index.html>>, (参照 2022-02-14).

[4] アーカイブの確認方法はMLのウェルカムメッセージや各投稿の末尾でご案内しています。



参考にしたい！！グッドプラクティス Vol. 4

JPCOARウェブサイト

JPCOARのウェブサイトは、2021年3月に先行して次期JAIR Cloud (WEKO3) に移行しました。それに併せてデザインを見直しています。

ここでは、JPCOARのウェブサイトを構築していくなかで気づいたTIPSを、“グッドプラクティス”としてご紹介します。

WEKO3へ移行する際のカスタマイズのご参考になれば幸いです。



左右に余白を設けてレイアウトをスッキリと

WEKO3ではウィジェットと呼ばれるブロックのようなパーツを配置して、ページを作成していきます。

ウィジェットを配置する際、左右いっぱいに広げて配置してしまうと、やや見づらくなってしまうため、JPCOARウェブサイトでは、敢えて左右に余白を設けてウィジェットを配置しています。

また、左カラムのウィジェットは、ウィンドウを狭めたときに狭くなりすぎないように、予め十分な幅を確保しています。



サイト全体に共通するスタイルはHeaderへ

ウェブサイトで使用されるフォントや見出しなど、ウェブサイト全体に共通するスタイルは、Headerのウィジェットへスタイルシートで記述しています。すべてのページで共通するウィジェットであるHeaderにスタイルシートを記述することで、ウェブサイト全体に共通のスタイルを適用できます。



見出しスタイル

JAIR Cloudは、2012年度
れたクラウド型の機関リポ

ウェブフォント (Noto Sans)

サイトのグローバルメニューはMenuウィジェットで

グローバルメニューはMenuウィジェットを用いています。JPCOARのウェブサイトでは、シンプルな状態で使用していますが、枠線や背景色も簡単に変更可能ですので、自機関のリポジトリにあったデザインにカスタマイズしてみてください。



南雲 修司 (東京工業大学・コミュニティ強化・支援作業部会)

このページの記述は、2022年1月時点のものです。WEKO3の仕様は今後、変更となる可能性があります。

イラスト：アイキャッチャー

JPCOARからのお知らせ

機関リポジトリコンテンツへの出版者版DOIの入力促進について

コンテンツ流通促進作業部会では昨年度、IRDBのレコードを用いて、国内の機関リポジトリに登録されているレコードにおける識別子やライセンスの付与状況を調査し報告書を公開しました¹。今年度は新チーム（DOIチーム）を結成し、この調査結果をもとに識別子やライセンスの普及活動に取り組んでいます。

その活動のひとつとして、出版者版DOI²（Crossref DOI）の入力の呼びかけを行っています。上記調査では、[Crossref REST API](#)を使用して、学術雑誌論文において出版者版DOIが付与されているにも関わらず、各機関リポジトリに登録されているメタデータにそれが入力されていない可能性があるレコードを特定しました。それらレコードについて、下記のとおり該当機関に提供し、出版者版DOIの入力を依頼させていただきました。

- JPCOAR会員機関：167機関（2021年11月18日付で送付）
- JPCOAR非会員機関：18機関（2021年11月22日付で送付）

DOIをはじめとした識別子によって、多様な学術情報の同定や関連付けを通して、学術情報の発見可能性の向上や効率的な学術情報流通の実現が見込まれます。DOIを利用してコンテンツの関連付けをしておくと、例えば、[Unpaywall](#)等OA論文を探すツールでのコンテンツの発見可能性が高まるなどのメリットがあります。ぜひ皆様の機関におかれても、新規・過去分を問わず、selfDOIの付与と出版者版DOIの入力を進めましょう。

なお、DOIチームではこの活動のほか、10機関のリポジトリ業務担当者に、DOI（selfDOI）・ライセンスの付与に関するヒアリング調査を実施いたしました。こちらの調査結果については、別の機会にご報告いたします。

三木 保孝（大阪大学附属図書館・コンテンツ流通促進作業部会）

出版者版DOIのメタデータへの入力方法

- メタデータスキーマがjunii2の場合は、メタデータ要素“DOI”に下記例のような形式でDOIを入力します。
<doi>info:doi/10.1000/7</doi>
- メタデータスキーマがJPCOARスキーマの場合は、メタデータ要素“jpcoar:relation”に下記例のようにDOIを入力します。

```
<jpcoar:relation relationType="★">  
  <jpcoar:relatedIdentifier identifierType="DOI">  
    https://doi.org/10.1371/journal.pone.0170224  
  </jpcoar:relatedIdentifier>  
</jpcoar:relation>
```

自機関リポジトリのコンテンツが出版者版の場合：relationType属性（★の部分）は“isIdenticalTo”

自機関リポジトリのコンテンツが著者版の場合：relationType属性（★の部分）は“isVersionOf”

¹ 西岡千文.“機関リポジトリにおける識別子・ライセンスの付与状況”. 2021, (オンライン), 入手先 <<https://jpcoar.repo.nii.ac.jp/records/680>>, (参照2022-02-14).

² 各機関リポジトリのコンテンツ自身のDOI（junii2で言う「selfDOI」）ではなく、学会・出版社が発行する学術雑誌論文等に付与されているDOIのことを指します。

本文のURL・ハイパーリンク は全て2022年2月14日時点のものである。

編集後記

企画から校正までずっと、楽しく勉強になりました。14号を担当できてよかったです。（熊崎）

温めていた企画を3人でやりすぎて特大号になりました。組織外の気の合う仲間とわいわい仕事できるのが作業部会のだいごみです。（林）

レイアウトを担当しました。記事が多くて大変でしたが楽しかったです。（南雲）

Webサイト: <https://jpcoar.repo.nii.ac.jp/>

Facebook: <https://www.facebook.com/jpcoar/>

Twitter: <https://twitter.com/jpcoar/>



JPCOAR Newsletter: CoCOAR 第14号

2022年2月28日 発行

オープンアクセスリポジトリ推進協会



記事中の画像は
CC BYの対象外です。